

ISSN 2186 – 3989

近現代の日本社会における「世間体」について  
－大衆消費社会の浸透と一面性社会の登場－

板倉 栄一郎

Considering about “SEKEN-TEI” in the modern Japanese society  
－ The relationship between consumer society and one-side society －

Eiichiro Itakura

北 陸 大 学 紀 要  
第58号(2025年3月)抜刷

# 近現代の日本社会における「世間体」について —大衆消費社会の浸透と一面性社会の登場—

板倉 栄一郎\*

Considering about “SEKEN-TEI” in the modern Japanese society  
—The relationship between consumer society and one-side society—

Eiichiro Itakura\*

*Received December 12, 2024*

*Accepted January 15, 2025*

## Abstract

In this paper, we have considered SEKEN-TEI with reference to feeling of jealousy. As a result, it has become clear that SEKEN-TEI is different before and after the World War II. In other words, before the war, jealousy was hesitant to be expressed within a community, but after the war, with the decline of communities and the emergence of a consumer society, it came to be expressed without hesitation. The reason for this is that the harmony between HONNE and TATEMAE collapsed as SEKEN changed.

And as SEKEN changed, SEKEN-TEI also changed from something that was hidden to something that was expressed, and in a SNS-society, it became clear that feeling of jealousy were expressed without hesitation. This shows that in a society lacking harmony, that is, one-sided society.

**Key-words :** ”SEKEN-TEI”, jealousy (as “lack”) , SNS-society, one-sided-society

## はじめに

社会心理学者の井上忠司は、その著書『「世間体」の構造』（井上 2007）の中で、「私たちは、生きた人間と生きた人間関係をとるもどすために、「世間体」の文化を再発見しなければならないだろう。「世間体」の文化再考が、むしろ今日だからこそ、つよくさげなければならないのである。」と記している（井上 2007 : 249）。この著書は、初版が 1977 年

---

\* 北陸大学経済経営学部 Faculty of Economics and Management, Hokuriku University

であり、この言葉は初版当時のものである。その後に歴史学者の阿部謹也が 1990 年代から「世間」に注目し、「世間」に関する一連の著書を世に送り出した。それ以後、阿部の主張を正統に受け継いだ法律学者の佐藤直樹並びに日本世間学会によって「世間学」として論じられている。そして、井上以降、著書のタイトルに「世間体」を冠して論じられたのは、歴史社会学者の犬飼裕一が 2021 年に刊行した『世間体国家・日本—その構造と呪縛—』であり、実に 44 年の歳月を待たねばならなかった訳である。この間、「世間体」を冠して正面切って論じられたものは、この 2 著に過ぎない<sup>1)</sup>。

本稿では、表題にもあるように近現代という時代の枠の中での「世間体」の特質を考察することが目的であるが、その前提として最初に、「世間体」の意味について確認しておきたい。『精選版・日本国語大辞典』<sup>2)</sup>では、①世間のありさま。世間多数の人々に共通のふるまい方。②世間の人々に対する体面やみえ。世間に対する体裁。と記されている。そして、①で、多数の人々に共通のふるまい方、②で、人々に対する体面やみえ、とあることから「世間体」は人と人との関わりが関係すると言える。②の世間に対する体裁についても、世間は集団や共同体、社会を指すという一般的理解に従えば、これらを構成するのは人と人との関わりであるということからすれば、やはり人と人との関わりと関係すると言える。一方で、人と人との関わりは、時代の変化や価値観の変化、環境の変化に伴い変化する。従って、「世間体」もそれらを視野に入れて考察すべきであろう。また①の「世間多数の人々に共通のふるまい方」が普遍的ではなく、その時代特有の「常識」に影響を受けながら時代と共に変化するもので、時代に応じてその“ふるまい方”も変わるはずである。要するに、井上が「世間」を、「世」は＜時間＞をあらわし、「間」は＜空間＞を表す、「この世は移り行く」などと言いつつ表したように、「世間」は移り行くことからすれば当然、「世間体」も変わるはずである。

これらのことを確認した上で、本稿では、冒頭に挙げた井上の、「生きた人間関係」という言葉を軸に、第 1 章、第 2 章で、「世間体」を正面切って論じた二人の研究者の見解を現代の視点に立って考察する。そして第 3 章では、前章で指摘した分析視覚に従って、主に戦後の「世間体」を「嫉妬」という感情概念を用いて考察することとする。「嫉妬」は、人と人とが関わる上で避けられない感情の一つであり、「世間体」と大きく関係すると思われるからである。そして、最後に、SNS 社会を迎えた今日、「世間体」が何処に向かっていくのかについて私見を提示したい。尚、本稿を進めるに際し、各章の内容に準じて拙稿を 1) ～10) に分けて紹介することを予め、お断りしておきたい<sup>3)</sup>。

## 第 1 章 『「世間体」の構造—社会心理学への試み—』について

最初に、井上忠司の著書（井上 2007）の内容を「世間」の構造を中心に確認した上で、現代的な観点に立って考察したい。

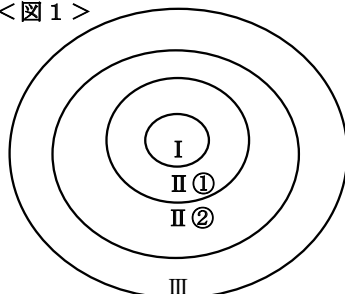
### 第 1 節 「世間」と「世間体」

最初に、井上忠司の著書を確認する。特筆すべき点は、「世間体」を論じるに際し、「世間」の構造を「準拠集団」という社会心理学の用語を用いて明らかにしたことである（井上 2007：97・140）。準拠集団とは「私たちが自分の態度や行動のよりどころとするような

集団」を意味する。従って、準拠集団を用いて「世間」の構造を解明することは、すなわち「世間体」を解明することに繋がるという立場である。次いで、準拠集団としての「世間」を区別する基準は「ウチ」と「ソト」の観念であるとし、ウチとソトの基準は、人のおかれている状況によって異なるので、スタティック（静的）な関係ではなく、すぐれてダイナミック（動的）な関係であるとする。そして、ウチは、ミウチやナカマウチのように主として個人の属する集団を指し、英語のプライベートのように個人自体を指すことがなく、この点に注意すべきである、と井上は言う。さらに、「世間」観の変遷を拠り所に、「わが国の人々は、古くから、ソトなる集団の自分を見つめるという行動様式を採用してきた」と論じ、「ソトの集団を準拠集団とする一般的な傾向とウチの集団の閉鎖性という一見、相矛盾するかに見えるこの二つの特徴が、実は相反することなく共存しているところにこそ、ウチソトの観念に特有のダイナミクスの本質があり」、「その点に＜ホンネ＞と＜タマエ＞のたくみな使い分けを余儀なくされるゆえんを認める」と論じる。

「世間」の構造については、心理学者の土居健郎の「あまえ」の理論を参考に下図のように設定する。土居の見解は、「ウチとソトの生活空間は3つの同心円（筆者註：内から順に親子→身内・仲間内→他人）からなり、その際、ウチとソトを区別する目安は、＜あ

＜図 1＞



・井上（2007）・124 頁を加工して引用。

I ミウチ・ナカマウチ、

II ①せまいセケン、II ②ひろいセケン、

III タニン・ヨソのヒト

まえ＞に基づく「遠慮」の有無であった。すなわち、親子の間には遠慮がないが、それは親子が他人ではなく、その関係が＜あまえ＞におかれているからであり、一方、親子以外の人間関係は、それが親しみをますにつれて遠慮が減り、疎遠であるほど遠慮は増してゆく」という＜あまえ＞を通した人と人との距離感について明らかにしたものである。

この土居の見解を参考に、井上は、「いまかりに遠慮がはたらく人間関係を中間帯とすると、そのウチに遠慮がないミウチの世界があり、ソトがわには遠慮をはたらかす必要のないタニンの世界が位置することになる。いちばんウチがわの世界と、いちばんソトがわの世界は、無遠慮である点で共通している。すなわち、ミウチの世界では、あまえてい

てへだてがないので無遠慮なのであり、タニンの世界は、隔てはあっても、それを意識するする必要がないので無遠慮なのである。はやい話が、ミウチのあいだでは、「ミウチの恥にふた」をすることができ、タニンの前では「旅の恥はかきすて」でもよいのであって、ともに「世間体」をつくろう必要はないわけである。」とし、「この中間帯こそが「世間（セケン）」である、といわなければならない。」と主張するのである。要するに、井上は、「世間（セケン）」をミウチやナカマウチとタニンやヨソノヒトの両者の中間帯にあって、私たちの行動の拠り所となる準拠集団であることを明らかにしたのである。

## 第2節 現代的な視点から見た「世間体」の構造

井上は、2007 年の本著の再版に際し、「学術文庫あとがきー補遺にかえて」（井上 2007：263-270）で、「理念としての「世間」の構造モデルは、依然として（筆者註：2007 年当時）有効性を失ってはいない」と主張するが、しかしながら、一方で、近年、ますます「セケン」の輪郭がぼやけてきていることは否定できないとし、「情報・通信（最近では IT 関連）の技術や、マス・メディア驚異的な発達によって、「セケン」はいちじるしく拡大した。た

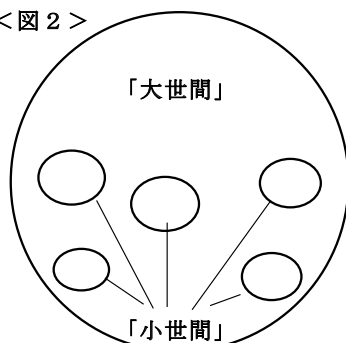
めに、「セケン」が「アカのタニン」ないし「ヨソのヒト」の領域へと浸透し、両者の境界がすこぶるあいまいになってきた。」「同時に、他方で、「セケン」が「ミウチ」ないし「ナカマウチ」の領域へと浸透し、両者の境界があいまい化している」ことも指摘する。そして、後者に関して、当時の若者のファッション行動を例に挙げて、「いまや「ナカマウチ」こそが、あたかも「セケン」の一部であるかのような観さえ呈している。」とし、それは「ひとの目を気にすること」、要するに、「ひとの目」とは特定の人のまなざしではなくて、「世間の目」のことであると論じるのである。

このように、井上は、理念としての「世間」の構造の存在及びその構造が近年、曖昧になってきているということを指摘したが、この点に関しては、メディアやインターネットの発達などによって様々な情報が瞬時に獲得できることでソトの世界と容易に繋がることのできるようになったことや伝統的な共同体や地域の衰退によって人間関係が希薄になった結果、ミウチやナカマウチが以前のように強固に結び付くことがなくなったことなどが根拠として挙げられる。本稿の関心からすると、特にメディアの影響によってそれらの境界線が曖昧になったという指摘は「世間体」を分析するに際して示唆的である。筆者は拙稿で、戦後の「世間」はテレビをはじめとした、情報を発信するという意味での「大世間」と、その中に複数点在する、社縁や趣味縁、ミウチやナカマウチなどを基礎とする「小世間」の「二つの世間」が存在すると論じた<sup>4</sup>。具体的には、

- 1) 時代が進むに従い、「大世間」は、メディアの高度化・多様化によって人々の個人化を誘発する装置になってしまい、情報発信ツールとしての役割が形骸化した。
- 2) 「小世間」は、ミウチやナカマウチの縮小化（衰退）が進む一方で、社縁や趣味縁などの出現によって点在するようになった。
- 3) 「小世間」における人間関係の希薄化が進むと理論上、個人単位にまで行き着き、SNS 社会がそれを助長している。（筆者註：それは家族も同様で、近年、指摘されている食卓における個（孤）食などは家族という単位が更に分化された結果である。）

翻って、井上が再版本でも繰り返す、「世間体」とはソトなる「世間」（の常識や相場）を判断の拠り所にして、ウチなる自分を見つめ、恥ずかしくない行動をすることである」、

<図2>



・拙稿をもとに筆者作成

「大世間」は情報を発信、「小世間」はミウチ・ナカマウチ・社縁・趣味縁

と主張しているのは、社会心理学の立場から、時代が変わっても依然として「世間の目」が人々に内在しているということを前提とした論理である。実は、この「世間の目」の存在も拙稿で取り上げた処であり、社会学者の見田宗介と大澤真幸の分析を拠り所に、「世間」の性格の変質を論じる過程で「まなざしの地獄」から「まなざしの不在」について論じた<sup>5</sup>。詳しくは拙稿に譲るが、「まなざしの不在」、要するに「世間の目の不在」が現代の日本社会の特徴の一つであり、それが個人化や規範意識の希薄化にも関係することからすると当然、井上が定義する「世間体」の概念—特にソトに対しての「世間体」—が現代の日本社会にも当てはまるか否か、という疑問が残る。私見では、メディア

の高度化・広域化と多様化によって形骸化した「大世間」や不特定の人々から直接、視線を浴びるという意味での「世間の目」が不在であるという拙稿の見解からすると、井上が再版で論じた「セケンはいちじるしく拡大した」と見るよりも「他人（タニン）の領域が著しく拡大した」と解釈した方が妥当であると考えられる。

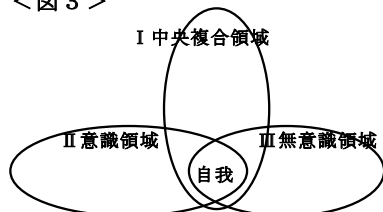
## 第2章 『世間体国家・日本—その構造と呪縛—』について

次に、犬飼裕一の著書（犬飼 2021）の内容を確認し、問題点を指摘する。前出・井上は、「世間」の構造を用いて「世間体」を論じたが、犬飼は、「世間体」と何かということに直接、問いかけるところから出発する。氏は、「世間体」を考える上で「規律と罰則（褒賞）」「意識と無意識」を重要な要素として設定し、世間体を「個人間あるいは特定の集団（2人以上）において、その社会生活上・コミュニケーション上で機能する、顕在化・潜在化した比較的強固な規律と罰則（または褒賞）の構造」と定義する（犬飼 2021:29-30）。ここで予め、確認すべきは、井上以降の日本社会の変化である。犬飼の著書には、例えば、宗教観、コロナ禍、ネット社会、民主主義といったキーワードを「世間体」と関係付けて取り上げている。本章では、それらを逐次、取り上げることはせず、同著の基盤をなしている「世間体」の2つの要素を重点的に取り上げて考察したい。

### 第1節 「意識と無意識」

最初に、「意識と無意識」（犬飼 2021:26-30）について、犬飼は、主に認知行動療法で用いられる「自動思考」を取り上げる。自動思考とは、本人が気づかないうちに特定の行動をとる（あるいは取らない）ように自らを仕向けるものである。これは「目に見えない部分」であり、氏はそれを「無意識の部分」と位置づけ、「世間体」はこうした意識と無意識領域にまたがり、法律といった顕在化した規律だけではなく潜在的に存在する（あるいは

<図3>



・犬飼（2021）・22頁を加工して引用  
I 社会性規律≒世間体、II 顕在規律（法律）  
III 潜在規律（世間体、個人的規範、伝統に  
基づく習慣など）

存在すると信じられている）規律を広く包含して人の行動を決定づけている、として、これを「無意識領域の世間体」と称する。加えて、氏は、「世間体」は、時代や集団、組織やコミュニティによっても変遷すると論じており、これは井上の言う「世間のダイナミクス」に相当する。この点については、筆者も異論はなく、筆者は以前に、近現代の「世間」の変質について、身分差・地域差・性差の観点から論じ<sup>6</sup>、次いで現代に至る「世間」の構造の変質が1980年代以降が源泉にあるということを論じた<sup>7</sup>。従って、当然、1980年代を境に「世間体」も変化・衰退したのではないかという仮説が導き出せる。

更に、ここで、確認しておかなければならないのは、犬飼も指摘するように「世間体」とは“個人の心の中”に存在するという点である。拙稿で筆者は一億総中流“意識”を重要視したが<sup>8</sup>、氏は“意識”と“無意識”とに設定したという点が特徴的である。氏は、「世間体」は、構造としては確かに存在するが、個人の受け取り方や対応の仕方によっても変化する、と記している。確かに、犬飼が例示するような、夏場のエアコンを巡る上司と部下の考え方もあり、個人によって受け取り方や対応がまちまちであるという指摘については、その通りである。しかしながら、個人の受け取り方や対応の仕方によっても変化する、ということは、裏を返せば、個人の内奥はあくまで個人に帰すべきであって、個人の内奥に客観性や常識、「世間体」が存在するか否かを可視的に判断することは難しい。従って、それを「世間体」という枠で括ることには限界がある。私見では、本人の内奥—本音—とは別に、「表面的な部分」や「目に見える部分」で規律に従ったり、言動をしたりする、そのこと

こそが「世間体」一井上の言う、ホンネとタテマエの使い分けである。故に、犬飼が示した「無意識領域の世間体」という見解が成り立ちうるのかという疑念が生じるが、この点については、次節で「規律と罰則（褒賞）」を考察した際に更に論じることにした。

## 第2節 「規律と罰則（褒賞）」

次に、「規律と罰則（褒賞）」（犬飼 2021:24-26）についてである。犬飼は、「この場合の「規律」とは、「世間体」がもたらす「こうあらねばならない」といった決め事であり、「罰則」は、その＜世間体＝規律＞を守れなかった、あるいは、そこから外れた時にもたらされる「ペナルティ」、つまり「しっぺ返し」である。その裏返しとして、「規律＝世間体」に則していれば与えられる（または、与えられるであろうと信じる）褒賞を包含した構造だ」と説明している。そして、「事故や災害などで電車が大幅に遅れた時、それにも関わらず、あえて行列に並んで出社に備える」場面が散見されることに触れ、これを「規律と罰則（褒賞）」の事例として挙げており、続けて「法律は世間体の一部をなすともいえる」と縮めている。

この点について、阿部謹也は「日本社会には（筆者註：西欧で言う処の）社会や個人が存在せず、「世間」存在する」と定義し、また佐藤直樹は「日本社会は、法のルールに頼るのではなく、「世間」のルールに頼る」と、法律と「世間」を対置したものと捉えている。従って、世間学の立場からすると、「法律は世間体の一部をなす」という氏の見解とは相容れないものになってしまう。筆者は、拙稿で以下の3点を指摘した<sup>9</sup>。

- 4) 伝統的な共同体では本音を表に出さずに生きていくことが“先人の知恵”として継承されてきたが、共同体の衰退によって本音と建前の調整が効かなくなってきた。
- 5) 1980年代を境にメディアの影響によって本音を出すことに躊躇しなくなった時代に突入したことで、建前が衰退し本音が出た、いわゆる、「対解消」一建前と本音の関係が解消一の時代を迎えた。
- 6) SNS社会を迎えた今日、SNS等を通じて本音が跋扈するような社会一一面性社会一を迎えたのではないかと主張した。

併せて、法律や伝統的な習慣、決まり事は現在生きている人々が直接、その制定や決定に関与したわけではなく、伝統として受け継がれてきたという意味では、建前である、とも拙稿で主張した。「世間体」は、「世間」に対するみえや体面であり、本音ではない、ということからすれば、本音ではない、建前としての法律と建前としての「世間体」は同類項で括られるであろう。

しかしながら、「世間体」は建前であるという私見と前節で触れた「無意識領域の世間体」との関係性について考察した場合、氏とは若干、見解が異なる。前節で取り上げた上司と部下のエアコンの事例は、部下が自分の本音と上司の機嫌を慮る場面であるが、そこには本音と建前との葛藤があることが想像でき、葛藤するという行為自体、それは十分に“意識”をしているということになる。また、遅れた電車に乗って出勤する事例でも、遅れても出勤（筆者註：同著では出社と表現）しようと考えた人は、その場面では本音として“欠勤する（したい）”という思いが脳裏を過ったことも十分に想像できる。そして、そこには、本音は欠勤したいけれども、建前としては、「世間の目一職場（上司）の目一」もあるので出勤しなければならない（せざるを得ない）、という建前と本音の葛藤がある。要するに、それは“無意識”なのではなく、十分に“意識した”上での判断であると考えの方が自然である。本音は出勤したくはないが、建前として出勤を決意したのであり、その決断には葛藤という“意識”が十分に働いているのである。



加えて、上司と部下との関係や立場について考える時、“世代間ギャップ”にも留意する必要がある。井上が出版した 1977 年から 40 年以上の歳月を経る中で、その間、日本社会は急激な変貌を遂げた。それを象徴すべきキーワードを本稿の目的に沿って大まかに列挙すると、その一つは大衆消費社会の浸透であり、一つはネット社会の登場である。犬飼は、これらの時代の特徴も取り上げて、現代的な視点に立って幅広く「世間体」について論じており、参考になる。翻って、この 40 年以上の間に幾つもの「○○世代」という語句がその時代の集団を特徴づけるキーワードとして出現し、その実態はとくかく、各世代の人格的特性や傾向性を表すキーワードとなっている。そして、そのカテゴライズされた語句は、差異化―特に前世代との差異化―されるのが一般的傾向である。そのことからすると、先に犬飼が挙げた 2 つの事例は、ある特定の年代には当てはまるけれども、それ以外の世代には当てはまらない可能性も出てくる。例えば、気遣いの無さや自己中心的な態度や考え方が“世代間ギャップ”を象徴するキーワードとして取り上げられることも多いが、一方で、これは井上の言うダイナミクスをもたらす要因であるとも考えられる。犬飼自身、「世間体」は、「構造としては確かに存在するが、個人の受け取り方や対応の仕方によっても変化する」と記していることは先に確認した通りである。むしろ、着眼すべきは、規律として位置づけられてきた「世間体」を考察するに際して、戦後の民主主義の理念である「個人の尊重」が時代を経るに連れて、他者との折り合いよりも自身の都合を優先する「私」の優先にすり替わってしまっているという実情を踏まえて考察することが重要であるということである。そして、誤解を恐れずに言うなら、「公」―一般的・常識的なという意味での―としての性格を持つ「世間」、そしてそれに準じる「世間体」が「私」の優先によって形骸化していく、そのプロセスの解明が現代の日本社会における「世間体」の解明―その存否も含めて―にも繋がると考えるのである。

### 第 3 章 「嫉妬―世間体―大衆消費社会」の相互関係について

#### 第 1 節 「世間体」と「嫉妬」

本章では、近現代における日本社会の時代の流れの中で「世間体」が変化―衰退―したのではないかという仮説を検証するために、「嫉妬」という感情概念を用いて考察をするが、その前提として「嫉妬」の意味について確認しておきたい。

『精選版・日本国語大辞典』<sup>10</sup>によると、「嫉妬」とは「①自分よりすぐれたものをうらやんだりねたんだりする気持ち。やきもち。ねたみ。②また、自分の愛する者の心が他に向くのをうらみ憎むこと。」(筆者註：①・②は筆者に拠る)を意味する。この点について、社会学者の G.ジンメルは、「嫉妬」と「ジェラシー」を分け、「この二つの感情は疑いもなく人間的な状態の形成にとって極めて大きな意義をもつ」とし、「嫉妬」を「獲得」に、「ジェラシー」を「保持」に対応させている<sup>11</sup>。「嫉妬」研究には長い歴史があり、筆者は断片的な知識しか持ち合わせていない。従って、本章では、政治学者の山本圭の近著、『嫉妬論―民主主義に渦巻く情念を解剖する―』(山本 2024)を参考にして考察することにしたい。

山本は、「嫉妬」は主に「欠如」に関わり、「ジェラシー」は「喪失」に関わるものと区別している。本章では、大衆消費社会の浸透との関係から「嫉妬」、つまり「欠如」との関係で論じることにするが、その前に、「嫉妬」が誰に対して、どの範囲まで及ぶのか、について明らかにしておきたい。氏は、この点について、「嫉妬心が首をもたげるのは、自分を他人と比較する時に他ならない。つまり、嫉妬の感情は比較可能なもの同士のあいだに生



じるということだ。裏を返せば、比較できない相手に対しては、私たちは嫉妬を感じないということでもある。」と明言している。同著では「隣人」という言葉が散見されるが、これを前出・井上の「世間」の構造に当てはめてみると、「世間体」は隣人、(井上の言う「せまい世間」)やミウチ・ナカマウチの範囲で生じるものであると言える。因みに、嫉妬感情は家族やミウチ・ナカマウチでも起こり、例えば、兄弟同士での学業成績や運動神経の優劣などが挙げられるが、ここでは取り上げない。

興味深いのは、「嫉妬は自らを偽装する。自分の嫉妬心を他人に知られたくない、自分でもそれを認めたくないという思いから、嫉妬はなかなか外部に現れない。」という指摘である。前章で、犬飼の「無意識的領域の世間体」の存在について疑念が残ると記したが、「世間体」と「嫉妬」との関係性を考慮すると、偽装という行為自体、それは恣意的であり、意識的である。故に、「嫉妬」感情は明らかに“意識的領域”であり、「世間体」と「嫉妬」との関係性について論じる限りでは、「無意識的領域の世間体」は存在しないと考える。

また、山本は、社会心理学で用いられる「社会的比較理論」から、「一般に、社会的比較は、優れた身体能力や知性、あるいは財産やプライベートの充実度などの点で、自分より優れた他者と比較する「上方比較」と、自分より劣位にある他者との比較を指す「下方比較」に分けることができる」とし、続けて「私たちはたえず上と下を見ながら、自分の立ち位置をはかる悲しい生き物なのである。」と締めている。更に、氏は、これらの比較を通して生じる「嫉妬」を「上方嫉妬」と「下方嫉妬」と名付け、「より興味深いのは、「下方嫉妬」の存在である。通常、嫉妬感情は自分より優れた者に向けられる。しかしこの感情が厄介で、同時に面白いのは、嫉妬の対象が必ずしも自分より優位な者に限られないということだ。つまり、私たちは自分より下方にある、もしくは劣位にある人々に嫉妬することがありうる。」と論じる。この点に関連して、現代の日本社会では、例えば、社会的地位や肩書が高い者が「名誉や金銭」を得て、それがメディア等を通じて公表された時は“羨望”に基づく「嫉妬」が生じるし、逆に、社会的地位や肩書が低い者に対しては「(低い地位)のくせに...!!」という“欠如”に基づく「嫉妬」が生じる。ここで強調したいのは、それらの「嫉妬」が、個人に対してというよりも「嫉妬」をする者から見た“社会的地位や肩書に対して”のものであり、今一つ強調したいのは、それらの「嫉妬」は、「小世間」やミウチ・ナカマウチに対してではなく、SNS 社会の到来以後、次第に不特定多数にまで及んでいるという事実である。極論になるが、SNS 等での相手の気持ちを配慮しない辛辣なコメントを目にする限り、また、前出・井上が言う“生きた人間関係が存在しない”という意味でも、SNS 社会には「世間体」は存在しないと考える。

## 第2節 「嫉妬」と大衆消費社会

筆者は拙稿で、歴史学や民俗学を拠り所に、戦前と戦後－1980年代以降－の「世間」の変質について私見を示した<sup>12</sup>。「嫉妬」との関連から整理すると、以下の通りである。

- 7) 戦前は、共同体の中で“生きていくため”に、目立たず、自身の気持ちや思いを抑えて周囲と互いに協力しながら生きていくことを旨とした。それは、本音と建前を調整しながら生きていくという知恵である。 【「嫉妬」を表に出さない時代】
- 8) 近代日本の発展に伴う産業構造の変化によって、大正期から昭和初期にかけて官吏やサラリーマンを中心とする新中間階級層が浸透した。彼らは、核家族であり、一定度の学歴を有した。またアメリカを中心とした外国文化に影響を受けた。

【伝統的共同体(旧来の「世間」)の衰退】

- 9) アジア・太平洋戦争の敗戦を経て、高度経済成長期にはアメリカ文化やテレビを中心とするメディアは大衆に強い影響を与えた。特にテレビの圧倒的な需要とそこから発信される情報によって、大衆は均一化・画一化された（それを「大世間」とした）。そして、1980年代前半のピートタけしの出現は、大衆をそれまでの建前主義から解放し、本音を憚らずに表出させる契機となった。これは「私の優先」とも関係する。【「世間」の変質の契機...「嫉妬」が表出する契機】

- 10) 以降、「私」の優先やメディア機器の高度化やIT社会、そしてSNS社会の登場によって、本音が跋扈する（建前一本音の対関係の解消）社会を迎えるに至った。

【「嫉妬」が憚ることなく表出する...一面性社会の登場】

戦前は、共同体で“生きていく”ために本音と建前をうまく調整した訳である。戦後は、高度経済成長を機に徐々に日本社会に浸透する大衆の消費行動と「嫉妬」との関係を考察することで「世間体」の変化－衰退－を明らかにするが、考察の手がかりとして、井上や犬飼も言及しているD.リースマンの「他人指向型」を取り上げることにしたい。

D.リースマンは、その著書<sup>13</sup>で、第二次世界大戦後のアメリカ中産階級の社会的性格が、幼児期に内化された目標に向かって進む「内部指向型」から同輩集団やメディアの情報に絶えず敏感に反応していく「他人指向型」へ移行しつつあると論じた。「他人指向型」の人間は、信念や習慣や権威に対してではなく、同時代人やマス・メディアに耳を傾け、行動の規範よりも同時代人によって発信される情報に絶えず注意を払うことが特徴である<sup>14</sup>。これらの特徴は、今まで論じてきた本稿の「世間体」の分析視覚とほぼ合致し、リースマンの「他人指向型」に言及する理由がここにある。

第一に、アメリカと日本とは文化的背景が異なるので、「他人指向型」が日本社会に適応できるか否か、という問題があるが、この点に関しては問題無いと考える。すなわち、経済的豊かさは消費行動を触発するが、この行動は文化的背景の相違を超えた、人間の欲望に起因するものだからである。むしろ、「個」の優先を文化的背景とするアメリカと「和」の優先を文化的背景とする日本とを比較する<sup>15</sup>と伝統的共同体の中で建前と本音を調整しながら生きてきた日本人には「内部指向型」が存在しなかった可能性も否定できないが<sup>16</sup>、それはさておき、経済的な豊かさを得た段階で、旧来のような伝統的共同体に依存しなくても生きていけるようになった日本人は、次は自らの欲望を満たすために消費行動を起こすようになるのである。

第二に、この消費行動は同輩集団との比較の中でメディアがもたらす様々な情報に誘発されて起こる。前節で、「嫉妬」の対象範囲は「小世間」やミウチ・ナカマウチであることを確認したが、それと「他人指向型」の特徴を併せて考えると、同輩集団の中に「嫉妬」が生じることは十分に想定できる。近代日本は、身分差・男女差・地域差の解消に向けて政治的・社会的に様々な取り組みがなされ、戦後、やがて“一億総中流意識”が日本国民の中に浸透した。日本国民の殆どが中流であるという意識を持つに至った訳である。しかしながら、この中流意識とは、他者との比較モノの所有の有無や生活レベルによって意識されたものである。そして消費社会は、J.ボードリヤールの言葉を借りれば、マス・メディアによって誘発された人々の消費行動によって得られた“記号化”されたモノであり、差異化－他者との区別－である<sup>17</sup>。このことは、要するに中流意識の根底には物質的豊かさを基準にした、他者との比較による満足度の高下が存在し、また差異化に起因する消費行動はまさしく「他人指向型」であり、他者と自身とを区別する。抛って、「嫉妬」が生じる可能性も少なくないのである。前節で、山本の「私たちはたえず上と下を見ながら、自分の立ち位置をはかる悲しい生き物なのである。」を引用した。確かに、これが人間の本質なのであろう。

## おわりにー「世間体」の衰退と一面性社会の登場ー

ここで、改めて、「はじめに」で確認した「世間体」の意味①・②と現代の日本社会とを比較対照したい。まず①の「世間のありさま。世間多数の人々に共通のふるまい方」については、「大世間」が伝統的「世間」の衰退やそれに伴う人間関係の希薄化、そして SNS 社会の出現によって形骸化し、その一方で各人の興味・関心に基づいた「小世間」が点在するという〈図 2〉の「世間」の構造からすると、共通のふるまい方の存在自体が見え辛くなっているということから、「世間」に準ずる「世間体」も衰退していくと考えられる。次に②の「世間の人々に対する体面やみえ。世間に対する体裁」については、人間関係の希薄化、「小世間」やミウチ・ナカマウチの縮小化、「世間の目」の不在、「私」の優先、「世代間ギャップ」から考えると、「世間体」は確実に衰退していると言える。

次に、SNS 社会と「世間体」との関係について論じてみたい。物質的な豊かさが人々に浸透するに伴い、次第に自身の健康や趣味などに関心が移り、それを SNS 等で表出するようになった。そして、「小世間」やミウチ・ナカマウチに対して向けられていた「嫉妬」は、今や不特定多数の個人に対して向けられるようになった。そこには建前は最早、存在せず、自身を表出することに躊躇しない人々が自身の本音を憚らずに表出する人々の「嫉妬」によって誹謗・中傷を受けるという構図が存在する。当然、両者共に匿名性であることも手伝って互いに躊躇せずに本音を表出するのであるが、それは匿名であるが故に本音が一層、色濃く表出する。繰り返しになるが、そこには体面やみえ、体裁といった建前が存在しないのである。筆者は、拙稿でそれを「一面性社会」と名付けた<sup>18</sup>欲望に基づく本音を躊躇なく表出する社会は、建前と本音の調整が効かなくなった社会であり、建前が意味をなさないことからすると、SNS 社会には「世間体」は存在しないと言える。

最後に、現代の日本社会を特色づける承認欲求について、これを「世間体」との関わりで言及することで、本稿の終わりとしたい。組織論を専門とする太田肇は、承認欲求について、「承認欲求のなかで基礎的な部分を占めているのは、「自分自身を知りたい」という願望である。」<sup>19</sup>と論じ、コロナ禍におけるテレワークが承認の不足をもたらしているのではないかと主張した。更に、同じ場所にいること生じる脳の共振や「場の空気」、「臨場感」という言葉を引き合いに出し、「要するに人間は五感、或いはそれ以上の感覚を使ってコミュニケーションを行っており、その中で意識していなくても承認欲求が満たされる」<sup>20</sup>と論じる。本稿の“生きた人間関係”というキーワードからすると、氏の見解は示唆的である。繰り返しになるが、「一面性社会」は本音が跋扈し建前が意味をなさなくなる社会である。特に SNS 社会では直接的に人と関わらない以上、建前、すなわち「世間体」は存在しない。そして、第 2 章・第 2 節で法律を建前として捉えたが、このことと SNS 社会の拡大や「世間体」の不在を勘案すると、日本社会の文化的特徴の一つである「調和と協調」の精神が衰退していくという由々しき事態が見えてくる。

前出・井上は著書の「はじめに」で、「だが、はたして「世間体」を古いもの、悪いものとして一方的に排撃し、否定しきってしまってもよいのであろうか。」との問いを我々に投げかけている（井上 2007：5）。「世間体」の衰退や SNS 社会における「世間体」の不在は、現代の日本社会における“日本人の危機”を招くのかも知れない。改めて今、井上の問いを真摯に受け止めたい。

## 註

- 1 2 著以外に「世間体」を冠して論じたものに、河本克秀「世間体意識尺度 2 項目版の交差妥当性と信頼性－因子構造の安定性と再検査法による信頼性の検討－」『社会福祉学』39-2、1998 年、がある。本論文は、福祉サービスの利用と世間体意識について検討したものであり、1998 年段階での特定の世代を対象としている。本稿は、歴史社会学や社会心理学の観点から本稿本稿を論じるので、本論文では触れない。
- 2 出典：『精選版・日本国語大辞典』、小学館、2006 年。
- 3 以下、①『近代日本社会における「世間」の諸相（その 1）－身分・地域・女性－』、北陸大学紀要第 55 号、2023 年 9 月、②『近代日本社会における「世間」の諸相（その 2）－身分・地域・女性－』、北陸大学紀要第 56 号、2024 年 3 月、③『近代日本社会における「世間」の諸相（その 3）－「世間」の変質と現代社会－』、北陸大学紀要第 57 号、2024 年 9 月、とし、註内では①、②、③と表記する。
- 4 前掲書（3）－③。2-8 頁。
- 5 前掲書（3）－③。10-11 頁。
- 6 前掲書（3）－①・②。
- 7 前掲書（3）－③。7 頁。
- 8 前掲書（3）－③。12 頁。
- 9 前掲書（3）－③。8-16 頁。
- 10 出典：前掲書（2）。
- 11 G.ジンメル『社会学－社会化の諸形式についての研究・上』（居安正訳）、白水社、2016 年。292-293 頁。
- 12 ①・②は主に明治期から戦前までの「世間」について、③は主に戦後の「世間」の変質及び IT 社会や SNS 社会における「世間」について論じた。
- 13 『孤独な群衆く上く』（加藤秀俊訳）、みすず書房、2013 年。110-112 頁。
- 14 前掲書（13）、110 頁。
- 15 東洋『シリーズ人間の発達 12・日本人のしつけと教育－発達の日米比較にもとづいて－』、東京大学出版会、1994 年。37-47 頁。
- 16 尚、リースマンは新中間層を「内部指向型」と位置付けている。一方で、世間学では、「日本社会には「社会」や「個人」がなく、あるのは「世間」である。」というのが基本テーゼとなっている。（阿部謹也『日本社会で生きるということ』、朝日文庫、2003 年）因みに、また、滝川一廣は「社会は共同体を本質とし、世間は共同性を本質とする」という仮説を提示している。（「日本の近代化と「世間」の生成－『世間胸算用』の世間、『人間失格』の世間、『学習院大学人文科学研究所』、2013 年。）
- 17 J.ボードリヤール『消費社会の神話と構造』（今村仁司・塚原史訳）、紀伊国屋書店、1995 年。67-76 頁。
- 18 前掲書（3）－③。8-17 頁。
- 19 太田肇『日本人の承認欲求－テレワークがさらした深層』、新潮新書、2022 年。32 頁。
- 20 前掲書（19）。35 頁。

## 主要参考著書

- ・井上忠司（井上 2007）：『「世間体」の構造－社会心理史への試み－』、講談社学術文庫。
- ・犬飼裕一（犬飼 2021）：『世間体国家・日本－その構造と呪縛－』、光文社新書。
- ・山本 圭（山本 2024）：『嫉妬論－民主社会に渦巻く情念を解剖する－』、光文社新書。